

夢明かりの果て

望月苑巳

袋小路に踏み込んで
あやうく踏みくだきそうになってしまった思い出。
赤ちようちん、ドブ板を渡る下駄の音
木洩れる奥居のかすかな天女の香
おまけに、釣瓶井戸辺の少女が、地球に話しかけている。
心の傷口に風がたわむれ
それが嫌で諸葛采の顔色をうかがい

新聞ひろげて井戸の中の蛙の棲み処を知ることになる
そんな春、印刷所の堀の向こうに
刷り上がったばかりの夕陽がはじかれていた
袋小路から順に日が暮れると
灯籠の灯りが人に媚びた鬼灯の悔いを見習う
明るすぎる夢は、目の前の卵の花が息をするせいだ。
夜半には時雨、明け方の燭光
なだらかな女の肩にも似た一日がまた始まるのだ。
夢の中では
湖のような水溜りに語りかける水鳥が
釣瓶井戸辺の少女だったことに気づく
旅の終わりに駄馬が戯れ唄を
うたうのはそのさきにせつない水が
あるのを本能的に知っていたからだろうか。

老婆に呼び止められ
すすめられたサイダアの
なんと思いい出の窪みにしみ込むことか。
レントゲンには映らない心の棘が
早魃のように広がるから
妻よ、その湖を見つめるな
湖に系図を問うな
あれは夢のなれの果て
涙のなれの果てだ。